違反をした他者を隠す嘘に対する児童の認識に親密性が与える影響の検討

The Influence of Intimacy on Children's Cognition about Lying to Conceal a Peer's Transgression

楯　　　誠
Makoto Tate

Abstract

This study examined how children recognize lying to conceal a peer's transgression. Especially, this study focused on revealing the influence of the intimate relationship between two persons: one person was a transgressor and the other witnessed the transgression.

Fourth to Sixth grade children (N = 579) participated in this study. They were presented with a series of vignettes which depicted a protagonist witnessing an intimate friend's or a mere acquaintance's transgression, and then the protagonist was asked by the teacher to report who committed the transgression. Children were asked to identify whether the protagonist's statement was a lie or the truth, to make a moral judgment how good or bad the statement was, and then to evaluate to what extent they felt friendly towards the protagonist.

The results show that no influences of the intimate relationship on the identification of the protagonist's statement was revealed. However, children judged that the protagonist's lie of concealing the intimate friend's transgression was less serious than lying to conceal the acquaintance's transgression. Children felt friendlier towards the protagonist who told the truth rather than the lie. On the other hand, they felt friendlier towards the protagonist who was the intimate friend of the transgressor. The findings are discussed with reference to children's reasoning about the protagonist's motive of whether to tell the lie or the truth.

Keyword：children, lying, intimate relationship, moral judgment

問題と目的

嘘と真実の発言に対する児童の認識研究（善悪判断や嘘と真実の区別（同定）の検討など）のテーマの 1 つとして，嘘と真実のタイプ，その発言がなされた状況や場面の要因がもたらす影響を検討するものがある。これまで様々な状況・場面における嘘と真実の発言が注目され，児童の認識の発達的変化が明らかにされるとともに，状況・場面内の諸要因および児童の文化的背景との関連性が報告されている。近年の研究を挙げるならば，例えば，他者の感情を慮る儀礼的嘘（white lie）については Heyman, Sweet, & Lee (2009) や Xu, Luo, Fu, & Lee (2009)，自己の向社会的行動を隠す謙遜の嘘（modesty lie）は Cameron, Lau, Fu, & Lee (2012)，Fu, Brunet, Lv, Ding, Heyman, Cameron, & Lee (2010) などがある。集団の利益のための嘘（blue lie）に関する研究としては，Fu, Evans, Wang, & Lee (2008) や Sweet, Heyman, Fu, & Lee (2010) が挙げられる。本研究では，学校場面において，違反（transgression）をした他者（仲間）を第三者から隠す嘘と，同一の場面における真実の発言を取り上げ，これらに対する児童の認識を検討する。

違反をした他者を隠す嘘は，嘘の分類学的研究

(Ekman，1989；Wilson & Carroll, 1991）や実際の嘘行動の生起に関する研究（Harari & McDavid, 1969；Greengrass，1972；Talwar，Lee，Bala，& Lindsay, 2004）において，しばしば取り上げられてきた。そして近年では，このタイプの嘘および同一場面における真実発言を児童がどのようにとらえ，判断するのかを検証する研究もいくつか現れている。違反をした他者を隠す嘘に対する児童の認識を検討したものに，楯（2014）の仮想場面実験による研究が挙げられる。この研究では，違反をした他者を隠す嘘を他者防衛的嘘と呼び，自分自身が違反をしたことを隠す自己防衛的嘘との比較を行っている。主人公自らが学校で違反をする，または他者の違反を主人公が目撃し，その後教師に誰が違反を行ったかを尋ねられるというストーリー課題が設定された。そして，その場面の主人公の嘘と真実の発言に対する，小学校4年生および6年生の嘘と真実の同定，善悪判断，および発言者への態度が検討された。その結果，調査対象の児童の大部分が状況・場面に関わらず嘘と真実の同定が明確に可能であることが示された。また善悪判断に関しては，他者防衛的嘘は自己防衛的嘘よりも否定的にとらえられてはいないが，真実の発言との比較では明らかに悪いと判断されていた。また，自己の違反への関与を報告するより，他者の違反を報告することをより良いと判断していることが明らかになった。発言者への態度は善悪判断とほぼ一致しており，嘘よりも真実を述べた主人公，違反に直接関与しなかった主人公に対して，より仲間として好意的な評価（「一緒に遊びたいと思う」「席替えの時に近くの席になりたいと思う」）をすることが示された。

同様の状況・場面を対象にした仮想場面実験による研究に，Chiu Loke, Heyman, Forgie, McCarthy, & Lee（2011）のものがある。これは「告げ口(tattling)」と言う観点から，他者の違反を教師に報告することに対する児童の認識（善悪判断や，報告すべきか否かといった報告の義務の有無など）を明らかにするものであった。特にこの研究では，他者の行った違反の程度・内容がもたらす影響を検討している。違反はカンニングやクラスメイトのお金を盗むといった大きい違反（major transgression）と，食事の野菜を残す，ポスターを踏んづけて少し汚してしまうといった小さい違反（minor transgression）の2条件が設定された。小学1年生から6年生を対象に検討を行ったところ，他者の大きい違反を報告することは小さい違反を報告することよりも良い，大きい違反を報告しないことは小さい違反を報告しないことよりも悪い，と児童は認識していた。また年少の児童は，大きい違反と小さい違反の双方を教師に報告すべきであると考えるが，年長の児童は大きい違反のみを報告すべきであると考えていることを明らかにした。Chiu Loke, Heyman, Itakura, Toriyama, & Lee（2014）は，日本とアメリカの児童を対象とした比較文化的研究も行っている。この研究からは，日本とアメリカの児童はChiu Loke et al.（2011）の結果と同様に，学年が上がるとともに，小さい違反を報告することを適切でないと評価するようになることが確認された。また，日本の児童はアメリカの児童と比較すると，小さい違反の報告をより良く適切なものと判断していることが明らかにされている。

さて，このような状況・場面における嘘と真実の発言に関する研究の課題として，Chiu Loke et al.（2014）や楯（2014）がともに指摘しているものが1つある。それは，ストーリー課題における登場人物の対人関係に関する情報が，児童の認識に与える影響の検討である。Chiu Loke et al.（2014）は，主人公（違反の報告者）と違反をした他者の関係性（友人か，ただの知人か，それとも嫌いな相手か）が，違反の報告をすることに対する児童の認識に与える影響の検討を課題として述べている。楯（2014）も主人公と違反をした他者との親密さが，嘘と真実の発言に対する児童の善悪判断や，発言者への態度などに関与する可能性を指摘している。対人関係の情報が児童の嘘の認識に及ぼす影響を検討した研究に，Walper & Valtin（1992）がある。この研究では，親密性の情報（家族か否か，友人か否か）が他の要因との相互作用によって，児童の善悪判断に関与することが報告されている。しかし，この研究で検討されているのは儀礼的嘘（「相手の着ている見苦しいセーターを「素敵だね」という」など）であり，親密性の情報は嘘の発言者と嘘の対象の間の関係を表すものであった。Chiu Loke et al.（2014）や楯（2014）の指摘を検証した研究は，ほとんど見られないのが現状である。

そこで，本研究では対人関係の情報，特に主人公と違反をした他者の親密性（仲の良い友達か，めったに遊ばないクラスメイトか）が，違反をした他者を隠す嘘と，同一場面の真実発言に対する児童の認識に与える影響を明らかにすることを目的とする。児童の認識の内容として，本研究では楯（2014）と同様に，嘘と真実の発言の同定と善悪判断，そして嘘と真実の発言者への態度を取り上げ，親密性の条件による差を比較

する。

Chiu Loke et al.（2014）は，児童は友人の違反の報告を，知人の違反の報告に比べて批判的にとらえる可能性があることを指摘している。この指摘から，親密な友人の違反の報告はより悪いもの，その報告をする主人公は仲間として好ましくないと児童はとらえる可能性が考えられる。逆に，親密な友人の違反を隠す嘘は，そうで無い知人の違反を隠す嘘よりポジティブに判断され，その嘘をついた主人公はより好意的に評価されることも考えられるだろう。あるいは，善悪判断と発言者への態度には親密性の条件によって認識にずれが生じるかもしれない。仲の良い友人の違反を報告する主人公に対して，その発言は良いものと判断しても，主人公自身はあまり好意的に評価しない可能性が考えられる。逆に違反をした友人を嘘によって隠すことは，その発言は悪いと判断されるが，仲間としてはより好意的にとらえられることも考えられるだろう。本研究では，これらの点に着目し検討を行う。

方法

調査対象　公立小学校に通う4年生200名（男子100名，女子100名，平均年齢9.84，標準偏差0.38），5年生185名（男子87名，女子98名，平均年齢10.82，標準偏差0.38），6年生194名（男子95名，女子99名，平均年齢11.87，標準偏差0.34）の計579名が調査に参加した。

課題内容　主人公の児童が学校で他の児童の違反を目撃し，その後教師に違反をした児童を知っているか否か尋ねられる，というストーリー課題が作成された。主人公と違反を行った児童の関係性（親密性：非親密条件―めったに遊ばないクラスメイト，親密条件―いつも遊ぶ仲の良い友人），および教師の質問に対する主人公の発言（発言内容：嘘条件，真実条件）の組み合わせから4つの条件が設定された（Table1)。ストーリー課題は親密性場面，違反場面，違反目撃場面，教師への発言場面，の4場面から構成された。各場面に対応する絵画刺激も作成され，ストーリー課題は4コ

Table1　ストーリー課題の内容

非親密―嘘条件
⑴：CくんとDくんは，同じクラスですが，一緒に遊ぶことはほとんどありません。
⑵：ある日Cくんは，クラスメイトをいじめてしまいました.
⑶：Cくんがクラスメイトをいじめているのを，Dくんが見つけました.
⑷：帰りの会のとき，先生は「だれが，クラスメイトをいじめたか知っていますか？」とDくんに聞きました．Dくんは「ぼくは知りません」と先生に言いました.
親密―嘘条件
⑴：CくんとDくんは，とても仲が良い友だちで，いつも一緒に遊んでいます。
⑵：ある日Cくんは，クラスメイトをいじめてしまいました.
⑶：Cくんがクラスメイトをいじめているのを，Dくんが見つけました.
⑷：帰りの会のとき，先生は「だれが，クラスメイトをいじめたか知っていますか？」とDくんに聞きました．Dくんは「ぼくは知りません」と先生に言いました.
非親密―真実条件
⑴：CくんとDくんは，同じクラスですが，一緒に遊ぶことはほとんどありません。
⑵：ある日Cくんは，クラスメイトをいじめてしまいました.
⑶：Cくんがクラスメイトをいじめているのを，Dくんが見つけました
⑷：帰りの会のとき，先生は「だれが，クラスメイトをいじめたか知っていますか？」とDくんに聞きました．Dくんは「Cくんがやりました」と先生に言いました.
親密―真実条件
⑴：CくんとDくんは，とても仲が良い友だちで，いつも一緒に遊んでいます。
⑵：ある日Cくんは，クラスメイトをいじめてしまいました.
⑶：Cくんがクラスメイトをいじめているのを，Dくんが見つけました.
⑷：帰りの会のとき，先生は「だれが，クラスメイトをいじめたか知っていますか？」とDくんに聞きました．Dくんは「Cくんがやりました」と先生に言いました.

＊調査用紙は，ある児童には「いじめ」事例が非親密―嘘条件，別の児童には親密―真実条件が割り振られるといったように，循環法でストーリー課題条件を組み合わせた。
＊このストーリー課題では，「Dくん」が主人公に該当する。

マ漫画形式で調査対象となる児童に提示された。課題の中で主人公が目撃した（他の児童が行った）違反事例は，栖（2014）と同様に「クラスメイトの靴を隠す」，「クラスメイトをいじめる」，「廊下の壁に落書きする」，「学校でお菓子を食べる」の 4 種類であった。ストーリー課題は，主人公および違反行為を行った児童が男子のものと女子のものを作り，調査対象の性別と対応させた。違反事例の提示順は上記の順に固定し，ストーリー課題の 4 条件を循環法（森・吉田，1990）で組み合わせることで，ストーリー課題における違反事例の影響に対するカウンターバランスを取った。結果として，違反事例とストーリー課題条件の組み合わせは，4 パターン設定された。

質問内容　栖（2014）と同様に，以下の 3 つの質問がストーリー課題における主人公の発言や，主人公そのものに対する児童の認識を明らかにするために設定された。

⑴　嘘と真実の同定質問　主人公の発言が，「嘘」か「本当（真実）」か「どちらでもない」かの 3 つの選択肢で区別させた。

⑵　善悪判断質問　主人公の発言の善悪の程度を，「とても悪い」から「とても良い」の 7 件法で尋ねた。

⑶　発言者への態度質問　嘘あるいは真実を報告した主人公に対する仲間としての好意的態度の程度を明らかにするために設定された。主人公と一緒に遊びたいと思うか，および席替えのときに主人公の近くの席になりたいと思うか，という 2 つの質問からなった。それぞれ「全然思わない」から「とても思う」の 4 件法で尋ねた。

嘘と真実の同定質問，および善悪判断質問は，主に Lee, Xu, Fu, Cameron, & Chen（2001）を参考に設定された。また，嘘と真実の同定質問と，善悪判断質問の間には順序効果があることが指摘されている（Wimmer, Gruber, & Perner, 1985）。そこで質問の順序は，嘘と真実の同定質問から善悪判断質問，発言者への態度質問となるものと，善悪判断質問，発言者への態度質問，嘘と真実の同定質問の順の 2 パターンが設定された。

手続き　調査用紙による仮想場面実験を行った。調査用紙は主人公たちの性別（2）×違反事例とストーリー課題条件の組み合わせパターン（4）×質問提示順（2）の計 16 種類が作成され，用いられた。調査対象となる児童に，調査用紙に記載された 4 つのストーリー課題を黙読させ，上記の 3 つの質問の回答を求めた。調査用紙は小学校の各クラスにて，教員を通して一斉に配布および回収がなされた。

結果

本研究では有意水準を 5 ％および 1 ％とし，統計的検定を行った。

嘘と真実の同定　発話内容の条件と一致した嘘と真実の同定をした者の数を集計し，それぞれの条件のおける比率を算出した（Figure1）。それぞれの学年およ

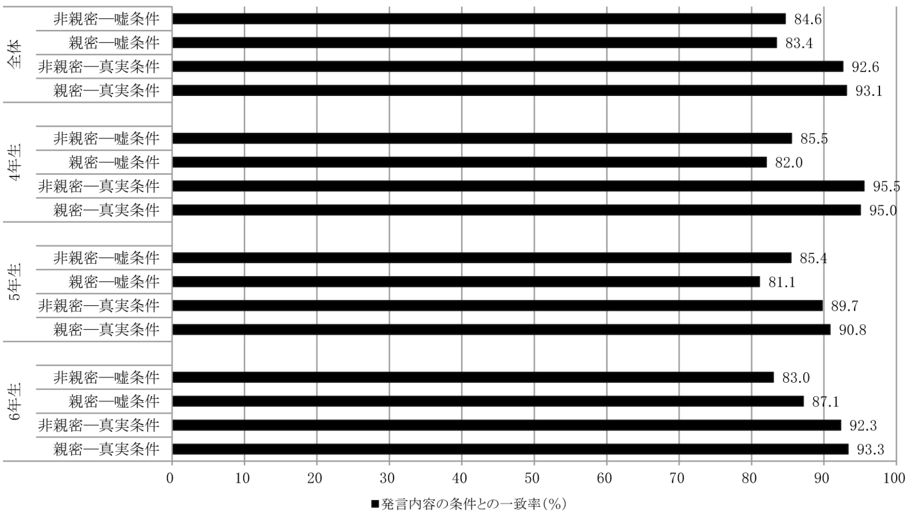

Figure1　学年およびストーリー課題条件別にみた虚と真実の同定の比率

びストーリー課題条件ごとに二項検定を行ったところ，すべての条件において1％水準で有意差が見られた。全ての学年およびストーリー課題条件において，発言内容の条件と一致した嘘と真実の同定をする者が明らかに多いことが示された。

次にストーリー課題条件ごとに，学年による嘘と真実の同定の比率の差を χ^2 検定によって分析した。しかし，いずれの条件においても学年による有意差は見られなかった。そこで学年を統合し，Cochran の Q 検定でストーリー課題条件間における嘘と真実の同定の比率の違いを検討した。その結果，有意差が認められ（Q（3）= 67.73，p <.01），条件間で同定の比率に違いがあることが明らかになった。そこで，多重比較（McNemar 検定，Bonferroni 法による有意水準の修正）を実施したところ，非親密―真実条件と非親密―嘘条件，および非親密―真実条件と親密―嘘条件の間に1％水準で有意差があった。同様に，1％水準の有意差が親密―真実条件と非親密―嘘条件，および親密―嘘条件の間に確認された。親密性の条件に関わらず，嘘の発言を嘘と同定する者に比べて，真実の発言を真実と同定する者の比率が高いことが明らかになった。

善悪判断　7件法で回答された善悪判断質問の結果を，−3点から+3点に得点化した。「どちらともいえない」が0点となり，マイナスになるほど「悪い」，プラスになるほど「良い」を意味するようにした。学年およびストーリー課題条件別にみた，善悪判断質問の得点の平均値と標準偏差を Table2 に示した。学年（4年生，5年生，6年生）×親密性（非親密，親密）×発言内容（嘘，真実）の被験者混合計画による3要因分散分析を行った。その結果，親密性の主効果（F（1,576）= 15.69，p <.01），発言内容の主効果（F（1,576）= 1449.90，p <.01），そして親密性と発言内容の交互作用（F（1,576）= 11.41，p <.01）が有意であった。

交互作用の単純主効果を検討したところ，発言内容の単純主効果は親密性のいずれの条件においても有意であった（非親密条件：F（1,576）= 1362.58，p < .01，親密条件：F（1,576）= 1054.66，p <.01）。一方親密性の単純主効果は，発言内容が真実条件では有意でなかったが，嘘条件では有意であった（F（1,576）= 27.57，p <.01）。善悪判断質問の得点の平均値は学年による差はなかった。また，親密性がいずれの条件においても，発言内容が真実条件における平均値は嘘条件のものと比べて明らかに高いことが示された。一方，発言内容が嘘条件においてのみ親密性の条件による差が見られ，非親密条件に比べて親密条件の平均値が高いことが明らかになった。

発言者への態度　4件法で回答された2つの質問の結果を，それぞれ0点から3点に得点化し，合計したものを発言者への態度質問の得点とした（範囲0～6点）。学年およびストーリー課題条件別にみた，発言者への

Table2　学年及びストーリー課題条件別にみた善悪判断の得点平均と標準偏差

	学年							
	4年生		5年生		6年生		全体	
ストーリー課題	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
非親密―嘘条件	-1.51	1.32	-1.65	1.18	-1.49	1.20	-1.55	1.24
親密―嘘条件	-1.37	1.53	-1.23	1.46	-1.18	1.36	-1.26	1.45
非親密―真実条件	1.72	1.52	1.56	1.50	1.57	1.28	1.61	1.43
親密―真実条件	1.75	1.34	1.62	1.38	1.61	1.25	1.66	1.32

Table3 学年及びストーリー課題条件別にみた発言者への態度の得点平均と標準偏差

	学年							
	4年生		5年生		6年生		全体	
ストーリー課題	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
非親密―嘘条件	2.22	1.52	2.15	1.55	2.12	1.30	2.16	1.46
親密―嘘条件	2.40	1.57	2.57	1.45	2.53	1.33	2.50	1.45
非親密―真実条件	3.66	1.58	3.41	1.68	3.10	1.55	3.39	1.62
親密―真実条件	3.75	1.63	3.82	1.44	3.34	1.50	3.63	1.54

態度質問の得点の平均値と標準偏差の値を Table3 に示した。善悪判断同様に，学年（4 年生，5 年生，6 年生）×親密性（非親密，親密）×発言内容（嘘，真実）の被験者混合計画による 3 要因分散分析を行った。その結果，学年の主効果（F（2,576）= 4.18，p <.05），親密性の主効果（F（1,576）= 40.97，p <.01），発言内容の主効果（F（1,576）= 223.08，p <.01)がそれぞれ有意であった。また，学年と発言内容の交互作用（F（2,576）= 3.77，p <.05），および学年と親密性の交互作用（F（2,576）= 3.41，p <.05)が有意であった。

学年と発言内容の交互作用の単純主効果を分析したところ，全ての学年で発言内容の単純主効果は有意であった（4 年生：F（1,576 ）= 108.61，p <.01，5 年生：F（1,576）= 80.33，p <.01，6 年生：F（1,576）= 42.35, p <.01)。一方,水準別誤差項を用いて学年の単純主効果を検討した結果，発言内容が嘘条件では有意でなかったが，真実条件において有意であった（F（2,576）= 7.00, p <.01)。Bonferroni 法による多重比較を実施したところ，4 年生と 6 年生の間に 1 ％水準，5 年生と 6 年生の間に 5 ％水準で有意差が確認された。全ての学年において，発言内容が嘘条件と比較して真実条件において得点平均が高かった。また，真実条件において学年差が認められ，6 年生は他の学年に比べて得点平均が低いことが明らかになった。

続いて，学年と親密性の交互作用の単純主効果の分析を行った。学年における親密性の単純主効果を検討した結果，5 年生と 6 年生において親密性の単純主効果は有意であった（5 年生：F（1,576）= 26.94, p <.01，6 年生：F（1,576）= 16.92，p <.01)。水準別誤差項を用いて学年の単純主効果を検討したところ，親密性の両条件において有意であることが認められた(非親密条件：F（2,576）= 4.63, p <.05，　親密条件：F（2,576）= 3.23, p <.05)。Bonferroni 法による多重比較を行った結果，非親密条件においては 4 年生と 6 年生の間に 1 ％水準，親密条件においては 5 年生と 6 年生の間に 5 ％水準で有意差があった。親密性の条件間の差は，5 年生と 6 年生で見られ，非親密条件と比較して親密条件の得点が明らかに高かった。また，学年差は親密性の両条件において認められ，非親密条件においては 4 年生に比べて 6 年生の得点平均が低く，親密条件においては 5 年生に比べて 6 年生の得点平均が明らかに低いことが示された。

考察

嘘と真実の同定　全ての学年およびストーリー課題条件において，大部分の児童が主人公の嘘の発言を嘘，真実の発言を真実と区別していることが明らかになった。児童期後半においては，基本的に発言内容の条件と対応した嘘と真実の同定が可能であった。これは，栖（2014）の結果と一致していた。また，他の状況・場面における児童の嘘と真実の同定を検討した研究（例えば Bussey，1999）とも類似した結果であった。

親密性の条件による差異は見られず，違反をした他者が親密な友人か否かは，児童の嘘と真実の同定に影響を与えないことが明らかになった。一方，発言内容による同定の比率の差が確認され，ストーリー課題で予め設定された真実の発言を真実と認識することに比べて，嘘の発言を嘘ととらえる比率が明らかに低いことが示された。嘘と真実の同定に，このような差が生じた理由は何であろうか。1 つの可能性として，「僕（私）は知りません」という主人公の発言が真実となるように，情報の推測，補足が児童側に生じたことが考えられる。本研究のストーリー課題では，嘘と真実の発言に至るまでの主人公の発言の意図や動機は明示されていない。そこで一部の児童によって，主人公は違反を目撃したが違反をした人物までは分からなかった，あるいは目撃したことを忘れてしまったといった，主人公の発言を真実と見なすようにする解釈がなされたのではないかと考えられる。

善悪判断　本研究の児童は，嘘は悪い，真実は良いと基本的に認識していた。これは栖（2014）と同様であった。親密性の影響は，嘘の発言に関して確認され，親しい友人が違反したことを隠す嘘は，めったに遊ばないクラスメイトを隠す嘘よりも悪くないと児童は判断した。この結果は，本研究の予想と一致していた。このような判断がなされた理由として，児童は親密な友人を隠す嘘に対して，主人公の友人を助けようとする動機があることを推測した可能性が挙げられる。Xu et al.（2009）は，嘘と真実の発言の場面（正しい情報が求められる場面と，儀礼的配慮が求められる場面）と発言の動機（Xu et al.（2009）では意図と表記）が児童の認識に与える影響を検討し，相手を助けようとする動機で発せられた嘘は，相手を傷つけようとする動機による嘘よりも，より良いと善悪判断することを報告している。本研究のストーリー課題では，主人公の発言の動機は明示されていないが，親密な関係性か

ら発言の愛他的動機を推測し，それが善悪判断に関与した可能性が考えられる。あるいは自己防衛的な観点から，このような状況下での嘘は多少許容されると判断しているのかもしれない。円滑な友人関係を維持し，学校生活を軋轢なく過ごすためにはこのような嘘をつくことはやむを得ない面があると，児童は認識していると考えることもできるだろう。

一方，Chiu Loke et al.（2014）の指摘からの想定とは異なり，親密性の情報は真実の報告の善悪判断に差をもたらさないことが示された。嘘の善悪判断で述べた，主人公の発言の動機の推測という点で考察するならば，親密な友人の違反を報告することは，少なくとも相手を傷つけようとする動機でなされたものではない，と本研究の児童は認識しているのではなかろうか。真実を告げた方が，長期的に見て仲の良い友人のためになると主人公は判断したと解釈した児童も存在するかもしれない。このような推測・解釈が，真実の善悪判断に関与した可能性があるだろう。またこの結果は，本研究で用いられた違反事例の内容との関連性が考えられる。Chiu Loke et al.（2014）では，善悪判断の文化差は小さい違反の報告においては見られるが，大きい違反の報告では見られないことが指摘されている。他者の大きい違反の報告に対する善悪判断には，小さい違反の報告に比べて，他の要因が影響を与える余地が少ないことが推測される。これは，文化差だけでなく，ストーリー課題内における状況・場面に関する情報にも当てはまるのではなかろうか。本研究で用いられた違反事例は，友人やクラスメイトが意図的に実施しなければ生じない内容であり，人や物を傷つけるものや学校の明確なルールを破るなど，どちらかといえば大きい違反に分類されるものと言えるだろう。他者が大きい違反をした状況においては，親密性の情報は善悪判断に影響力を持たずに，その報告は一様に良いものと児童は判断したとも考えられる。

発言者への態度　発言者の態度に関しては，真実の発言者への態度はより好意的・肯定的であり，嘘の発言者の態度はより否定的であった。これも栖（2014）の結果と同様であった。しかし，学年が上がるにつれて，真実の発言をした主人公に対する好意的態度が取られなくなることが示された。これは，6年生になるとより多くの情報から人物の評価を行おうとすることの表れかもしれない。 4年生，5年生は主人公が真実を報告するという情報だけで，シンプルに好意的な態度を示すが，6年生になると他の情報にも注意を向けるようになる。その結果として，ストーリー課題の中の限られた情報だけでは，主人公に対して下の学年ほど好意的な評価をするには不十分である，ととらえている可能性が考えられる。

親密性の要因の影響は5年生と6年生において確認され，親密な友人に関する何らかの発言をする主人公をより好意的にとらえるという結果が得られた。親密性と発言内容の間には交互作用は見られなかった。これは，対人関係に関する情報が，嘘と真実の発言をしたことと独立した形で，発言者への態度に影響を与えたことが伺える。主人公には仲の良い友人がいるという親密性に関する情報が，主人公への仲間としての好意的評価に単純につながってしまった可能性が高い。あるいは親密な友人の違反を隠すために嘘をつく主人公と，親密な友人の違反を正直に告げる主人公双方に，仲間として好意的な態度を取るに値する共通項を5，6年生は見出したという解釈もできる。善悪判断で述べたような，親密な友人の違反に対する嘘と真実の発言がいずれも愛他的な動機によるという推測が，主人公の仲間としての評価をより好意的なものに押し上げた可能性も考えられる。この点は，さらなる検討が必要であろう。

まとめと今後の課題　本研究は違反した他者を教師から隠す嘘と，同一場面の真実の報告に対する児童の認識に，対人関係の情報，発言者と違反者の親密性の情報が与える影響を検討した。児童の嘘と真実の同定には親密性は影響を及ぼさなかった。一方，善悪判断においては親密性の影響が確認され，親密な友人が違反をしたことを隠す嘘は，ただのクラスメイトを隠す嘘よりも悪くないと児童は判断していた。発言者への態度に親密性の情報は影響を与えているが，発言内容との相互作用は確認されず，仲の良い友人がいるという情報がある主人公に対して，児童はより好意的な評価をすることが示された。

今後のさらなる研究の発展を考えるにあたって，課題をいくつか述べる。1つは，ストーリー課題における主人公の嘘と真実の発言の動機の内容が，児童の認識に与える影響の検討である。本研究では，栖（2014）と同様に主人公の発言の動機がストーリー課題の中で明示されておらず，児童の解釈に委ねている状態である。また本研究では，善悪判断や発言者への態度に関する結果に対して，主に主人公の発言の動機の影響を大きな理由とした考察を行っている。本研究でなされた考察が妥当か検証するためにも，ストーリー

課題における主人公の動機の明示化による検討が必要である。発言の動機の情報の有無や，動機の内容（例えば Xu et al.（2009）のような相手を助けようとする動機や相手を傷つけようとする動機など）が与える影響を明らかにすることが課題と考えられる。あるいは Heyman et al.（2009）のように，児童が主人公の発言の動機をどのように解釈したのか，またそれぞれの質問の選択・評価の理由づけをオープンクエスチョンで尋ねる方法をとるのも研究の展開として考えられる。

また，善悪判断の考察においても述べたが，親密性の情報と違反の内容の相互作用が，児童の認識に与える影響の検討も必要であろう。Chiu Loke et al.（2014）の指摘した，親密な友人の違反の報告に対するより批判的な判断・評価は小さい違反に対して，より強く現れる可能性がある。今回の研究では親密性の影響が確認されなかった，嘘と真実の同定においても何らかの差が生じることも考えられるだろう。加えて，本研究は楯（2014）と同様に，児童期後半のみを調査対象にしている。Chiu Loke et al.（2011，2014）のように，対象の年齢幅を低学年の児童から成人などに広げることで，発達的変化をより詳細に検討することも研究の課題となるだろう。

引用文献

Bussey, K.（1999）. Children's categorization and evaluation of different types of lies and truths. *Child Development*, **70**, 1338-1347.

Cameron, C.A., Lau, C., Fu, G., & Lee, K.（2012）. Development of children's moral evaluations of modesty and self-promotion in diverse cultural settings. *Journal of Moral Education*, **41**, 61-78.

Chiu Loke, I., Heyman, G.D., Forgie, J., McCarthy, A. ,& Lee, K.（2011）. Children's moral evaluations of reporting the transgressions of peers: Age differences in evaluations of tattling. *Developmental Psychology*, **47**, 1757-1762.

Chiu Loke, I., Heyman, G.D., Itakura, S., Toriyama, R. , & Lee, K.（2014）. Japanese and American children's moral evaluations of reporting on transgressions. *Developmental Psychology,* **50**, 1520-1531.

Ekman, P.（1989）. *Why Kids Lie: How Parents Can Encourage Truthfulness.* Charles Scribner's Son's.（エクマン，P. 菅靖彦訳 2009 子どもはなぜ嘘をつくのか 河出書房新社）

Fu, G.,Brunet, M.K., Lv, Y., Ding, X., Heyman, G.D., Cameron, C.A., & Lee, K.（2010）. Chinese children's moral evaluation of lies and truths-roles of context and parental individualism-collectivism tendencies. *Infant Child Development,* **19**, 498-515.

Fu, G., Evans, A.D., Wang, L., & Lee, K.（2008）. Lying in the name of collective good: A developmental study. *Developmental Science*, **11**, 495-503.

Greengrass, E.R.（1972）. Effects of age and prior help on "altruistic lying". *Journal of Genetic Psychology*, **121**, 303-313.

Harari, H., & McDavid, J. W.（1969）. Situational influence on moral justice： A study of "finking". *Journal of Personality and Social Psychology*, **11**, 240-244.

Heyman, G.D, Sweet, M.A., & Lee, K.（2009）. Children's reasoning about lie-telling and truth-telling in politeness contexts. *Social Development,* **18**, 728-746.

Lee, K., Xu, F., Fu, G., Cameron, C.A. &Chen, S.（2001）. Taiwan and Mainland Chinese and Canadian children's categorization and evaluation of lie and truth telling: A modesty effect. British Journal of *Developmental Psychology*, **19**, 525-542.

森敏明・吉田寿雄（編著）（1990）. 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房

Sweet, M.A., Heyman, G.D., Fu, G., & Lee, K.（2010）. Are there limits to collectivism? Culture and children's reasoning about lying to conceal a group transgression. *Infant Child Development*, **19**, 422-442.

Talwar, V., Lee, K., Bala, N., & Lindsay, R.C.L.（2004）. Children's lie-telling to conceal a parent's transgression: Legal implications. *Law and Human Behavior*, **28**, 411-435.

楯 誠（2014）. 防衛的嘘に対する児童の認識―自己防衛的嘘と他者防衛的嘘の比較― 人文科学論集（名古屋経済大学人文科学研究会），**93**，45－57.

Xu, F., Luo, Y.C., Fu, G., & Lee, K.（2009）. Children's and adults' conceptualization and evaluation of lying and truth-telling. *Infant Child Development*, **18**, 307-322.

Wilson, J.M., & Carroll, J.L. (1991). Children's Trustworthiness: Judgments by teachers, parents, and peers. Rotenberg, K. (Ed). *Children's Interpersonal Trust: Sensitivity to Lying, Deception, and Promise Violation*. New York: Springer-Verlag. pp. 100-117.

Walper, S., & Valtin, R. (1992). Children's understanding of white lies. Winter, W. (Series Ed.), Watts, R.J., Ide, S., & Ehlich, K. (Vol Eds.). *Trends in Linguistics: Studies and Monographs, 59. Politeness in language: Studies in history, theory and practice*. Berlin/New York: Mouton de Gruyrer. pp. 231-251.

Wimmer, H., Gruber, S., & Perner, J. (1985). Young children's conception of lying：Moral intuition and the denotation and connotation of "to lie". *Developmental Psychology*, **21**, 993-995.

付記

本研究の一部は，日本教育心理学会第 52 回総会において発表された。